

# スペイン語の基本文型\*

寺崎英樹

## 1. 文型の目的

スペイン語の初等文法を中心は、何と云っても語形変化（伝統的な意味での *morfología*）であるが、それを一通りマスターした学習者が頭を悩ますのは、統語的な問題である。

その一つは、英語・フランス語のように語順が非常に固定化している言語に比べ、スペイン語は、それがはるかに自由なため、とまどうことになる語順の問題である。もう一つは、文の中核をなす動詞の統語的特徴に十分通じていないため、文の各要素間の統語関係がつかめないという問題である。

このような問題は、文法書も辞書も十分に答えてくれないのが普通なので、学習者は、スペイン語の個々の文について経験的に学んで行く外はない。しかし、語順の問題は措くとして、第2の問題について言えば、さまざまな文がどのような統語成分によって構成されているか、その全体系の骨格を簡潔に定式化して提示するならば、教育上効率的であろうと考えられる。このような見地から、文型という問題が浮かび上って来る。文型とは、機能上の特徴から設定された文の成分の種類と配列に基づき、文を分類し、図式化したものである。

## 2. 従来 of 文型案と問題点

スペイン語圏の文献で、今問題にしている種類の文型を取扱ったものは、余りないようである。この種の問題は、主に外国語教育の場で生れて来ることが

---

\* 本稿は、昭和53年2月25日、東京スペイン語学研究会で発表した草稿に大幅な修正・加筆を行ったものである。発表に際し、貴重な批判と示唆を下された原誠先生ほか出席者の方々ならびに草稿をまとめる過程で有益な助言と便宜を与えて下さった宮城昇先生に心から感謝の意を表したい。

多いからであろう。その代表的なものとしては、高橋 (1961; 1967), Stockwell, Bowen y Martin (1965), Dalbor (1972a, 1972b) などがある。

高橋 (1961, pp.487-491; 1967) のうち、より詳細な広文典 (1967, pp.381-392) について見ると、文の種類を説明する章で、説明の便宜のために18の文型が示されている。文型の提示自体が目的ではないので、記述に不整合な点も見られるが、詳細である。注目されるのは、文の要素として材料補語 (*complemento material*) という類を特に立て、普通、状況補語とされる要素のうち、前置詞 *de, con* をとるもの (の一部) を重要視していることである。<sup>(1)</sup>

Stockwell, Bowen y Martin (1965) は、教育上の見地から、英語とスペイン語を対照した研究であり、*basic sentence pattern* として英語・スペイン語とも6文型が立てられている。この中の5文型は、結局、英文法でおなじみの Onions から由来する5文型 (SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC) と同じであり、残る一つは、英語では *there*, スペイン語では *hay* の構文である。基本文型からは、変形によって派生的な文がさらに導き出される。この6文型は、英語との対比を目的として設定されたものである上に、簡単すぎるので、スペイン語の文の全構造をとらえるのに十分とは言えない。

Dalbor (1972a) では、*clause pattern* の名の下に、文をまず3種類に分け、これを合計9の文型に分類する。これに変形が加わって、さらに派生文型が導き出される。Stockwell et al. (1965) と比較すると、文型の数が増えた反面、*hay* 構文は基本文型から除かれている。<sup>(2)</sup>

以上の文型案には、種々の検討すべき問題点があると考えられる。まず第1に、文型の種類は、スペイン語の文を網羅的にとらえるのに十分であり、かつ最適な単純化を反映していると言えるか、第2に、高橋 (1961; 1967) が材料補語の名を与えたような統語的に重要な機能類が文型から漏れていないか、第3に、ほとんどの場合、主語のある構文のみが当然のように基本文型に採られ

(1) 材料補語とは、*La policía limpió de gente la calle. / José me obsequió con el libro.* のイタリック部分を指す。文例の中には、*en, por* をとるものも含まれている。

(2) Dalbor (1972b) は、文型を応用した教科書である。

ているが、hay 構文のような無主語文あるいは非人称文はどう扱うべきか、等である。以下では、これらの点に答える意図をもって、新たな試案を示したい。

### 3. 文型の設定方針

文型を設定する上で重要な問題は、どのような方法で設定を行うかということである。これには多くの議論があろうが、先験的に仮定された一般的な文の論理的構造や意味的構造から文型を導き出すのではなく、様々の文に共通の統語的特徴に着目して、帰納的に文型を導き出すのが良いと考える。

もう一つの重要な問題は、どの程度までパタンの単純化をおし進めるかということである。文の成分の形態的相違を重視すれば、文型の種類は増え、機能を規準に考えれば、逆に縮少が可能となる。ここで、文型設定の目的を顧みるなら、文型が複雑すぎるのは不便である一方、過度に抽象化されたパターンを作成するのは余り意味がないと言える。このような観点からすると、文型を設定するには、文の成分の機能に規準を置き、理論的に可能なパタンの単純化よりも実用的に最適<sup>(3)</sup>な単純化を図るのが妥当であろう。

文は、名詞一つでも構成され得る。しかし、今、動詞を含む統合をすべて *proposición* (clause) と呼ぶなら、基本文型が対象とする典型的な文は、定形（または人称形）の動詞を中核とする *proposición* である。したがって、文型はまた動詞型であると言ってよい。（以下では、不定形（非人称形）の動詞からなる *proposición* は、Jespersen の用語を限定的に借用して、*nexus* と呼ぶことにする。）これと同時に、平叙文以外の疑問文、受動文など広い意味での変形あるいは変容 (*modificación*) が加わった派生的な文型も、第1次的な考察の対象からは除かれる。また、再帰文も当面の考察から除外する。

文の成分には、それが欠けると文が成り立たないような義務的成分とそうではない選択的成分がある。一般に文型の考察対象となるのは、義務的成分のみ

(3) 松田(1977)は、変形文法の立場から、「実践的に最も有効な文型は表層構造と深層構造の間にあるのではないか」と述べ、「ここで求められるのは maximum depth ではなく optimum depth」であるとしている。

であるが、実際の文では、動詞の語彙的意味と文脈の問題がからむので、両者の区別がむずかしい場合がある。ここでは、特定の文脈にかかわらず、文中である動詞が通常とる統語型を考察の対象とし、この統語型を完全なものにするのに必要十分な成分を補完成分 (*elemento completivo*) と呼ぶことにする。これ以外の成分は、修飾成分と呼び、考察の外におく。

補完成分の中で、主語は動詞と文法的呼応関係を持つ点で形式的に重要であることは言うまでもない。しかし、スペイン語では、省略された場合は別にして、本来主語のない文もめずらしくはない。このような無主語文を特殊なものとするのは、形式論理的な偏見であろう。スペイン語の構造に即して、その統語的特徴を網羅的にとらえようとするなら、当然あらゆる型の文を文型に取り入れるべきである。

ところで、語順という観点から見れば、同じ文型と言っても、英語とスペイン語とでは、その意味合いが相違する。たとえば、*John ate some apples.* が SVO の文型であると言うとき、この文は、S, V, O の3要素から構成されることと同時に、各要素がこの順序で配列されることをも意味する。この文の語順は、特別の変形でも加わらない限り、変更できないと言ってよい。

しかし、スペイン語の文 *Juan comió unas manzanas.* が同じ SVO 型であると表現されるとしても、それは必ずしも3要素がこの順序で配列されることを意味しない。この文は、場面 (*situación*) に応じて、*Comió Juan unas manzanas.* / *Comió unas manzanas Juan.* / *Unas manzanas comió Juan.* のように VSO, VOS, OVS などの語順をとることが可能だからである。<sup>(4)</sup>

したがって、スペイン語の文型が表示する事柄のうち最も重要なものは、その文型がどのような成分から構成されるかということであり、大抵の場合、その配列順は、許容される可能性の中で最も常用されるパターンを示すにとどまる。語順の問題は、統語上重要な問題であるが、文型が考察対象とする「主述」関係とは別の「主題・説明 (*tema-tesis*)」関係または「所与・新規 (*given-new*)」

(4) これ以外の配列順も可能であるが、一般的に許容性は低くなるであろう。

関係などともかかわりがあり、別途検討を要するので、今はこれ以上触れない。

#### 4. 文型のまとめ

初めに、全部の文型をまとめて示す。合計13型である。

1. a. S V P  
b. V P
2. a. S V  
b. V
3. a. Ci V S  
b. Ci V Cp
4. a. S V Cp  
b. V Cp
5. a. S V Cd  
b. S V Cd Ci  
c. S V Cd Cp  
d. S V Cd Cpr  
e. V Cd

S = Sujeto.

V = Verbo.

P = Predicativo.

Ci = Complemento indirecto.

Cd = Complemento directo.

Cp = Complemento preposicional.

Cpr = Complemento predicativo.

文型は、動詞がどの要素を共通の補完成分としているかによって、先ず5類

に分類した。文型1は、Pを含むもの、文型2は、Sのみをとるか、またはどの補完成分もとらないもの、文型3は Ci を必要とするもの、文型4は Cp をとるもの、文型5は Cd をとるものである。各文型類の中では、無主語文の型を末尾に置いた。

動詞の種類から見ると、文型1は連結動詞 (verbo copulativo) が構成する型、文型2～4は連結動詞を除く自動詞が構成する型、文型5は他動詞が構成する型である。

文の補完成分の名称は、なるべく慣用に従ったが、慣用と一致しないものがある。連結動詞とともに名詞的述部 (predicado nominal) を形成する成分の名称には、一般に、predicado nominal, predicado, atributo, complemento predicativo などがあり、かなり混乱が見られるが、本論では predicativo (叙述詞, P) とした。この成分は、それ自体では述語をなさないが、名詞的述部の意味的中心を構成する点で、述語的 (predicativo) と呼ぶのにふさわしい機能を持つこと (中島, 1961, p.132 参照), および他の名称よりも混同される恐れがないことに基づく。

主語 (S) および直接補語 (Cd) は、一般の慣用と同じ概念を表す。

間接補語 (Ci) は、アカデミア (RAE, 1959) の概念より狭く、前置詞 para をとる要素は除き、a をとる要素のうち、代名詞化すると性にかかわらず、le, les になるものを指す。語彙的には、有生物であるのが普通である。

叙述補語 (Cpr) は、動詞の補完成分であると同時に、Cd に対しては P の機能を果たす成分を指す。

前置詞補語 (Cp) は、前置詞に支配され、動詞の補完成分となっているものの中、上記のいずれにも該当しない成分を指す。前置詞の種類は、この補語をとる動詞により一定している。一般に言われる状況補語および間接補語の一部に相当する。

以上の補完成分に該当しない動詞の修飾成分に対しては、補語という名称を避け、副詞的修飾語 (modificador adverbial) という名称を用いることにする。

## 5. 各文型について

以下、各文型について文例を示し、簡単に説明を加える。文例の多くは、Moliner (1966), RAE (1959; 1973) 等から自由に引用した。特に Moliner に負う所が大きい。

## 1a. S V P

Juan es pintor.

Elena está elegante hoy.

Es como la seda al tacto.

Los pendientes son de oro.

La casa quedó vacía.

この型は、連結動詞と叙述詞から構成される名詞的述部を中核とする。意味的には、PがSの同定 (identificación) または形容 (calificación) を行う。この型をとる動詞には、上記の他、parecer, resultar, seguir, continuar, venir, salir などがある。所在を表す estar (en) の構文は、この型ではなく、文型 4a に属する。

ser は、Sとして従属節か不定詞をとることがあるが、その場合は、V P S の語順をとるのが原則である。

Es necesario que estudiemos el español.

No le es posible seguir el viaje.

Sería igual que lo hubieses sabido antes.

このように、SがVよりも後に置かれるのが正常である文型を「倒置文型」と呼ぶことにしたい。

なお、アカデミア (RAE, 1959) が predicado de complemento と呼んでいた要素を含む次のようなタイプの文は、

Los perros llegaron sedientos.

いわば、Los perros estaban sedientos cuando llegaron. のように言い換えることができ、llegar が連結動詞ではなく、また sedientos が llegar に必要

な補完成分でないことは明らかなので、この文型には当てはまらない。2a型の1種と見なされる。

1 b. V P

Son las diez de la mañana.

Era de noche.

Está nublado.

連結動詞は、本来SとPの2項を結ぶのがその機能であるが、自然現象と時間を表す *ser, estar* の構文は、無主語文となる。

以上の外、次のような構文も、この型に入ると考えられる。

Es que yo no tengo tiempo para eso.

Me parece que ya no viene.

両構文とも、*que* 以下の従属節をSであると見なすことも不可能ではない。しかし、最初の *es que* 構文について言えば、意味的に「*lo que ocurre es que ...*」と解釈し得る (Moliner, 1966, II, p.1145 参照) ものであり、そのような根底にある構造から無主語文に転化したと考える方が合理的であろう。なお、

Es de esperar que todo se solucionará.

のような文では、*de esperar* が形容詞句となっていて、従属節はSであると考えられるから、1a型の倒置文型 (V P S) に入れるのが妥当である。

上記のような構文の *parecer* について、アカデミア (RAE, 1959, § 284) は、*convenir, importar* とともに単人称 (unipersonal) 動詞に含め、主語は従属節であるとしている。これに対し Seco (1953, p.188) は、3動詞とも非人称動詞ではないとした上で、従属節がSであると主張している。確かに、*convenir, importar* については、Seco の主張が正しいと判断される。No conviene que vengas. という構文は、No convienen tus proposiciones. という構文と主述構造の上で相違があるとは考えられないからである。

しかし、*parecer* については、アカデミアや Seco が言うように従属節がSであるとは考え難い。*convenir* と比較すると、*parecer* は No parece que vengas. のように同じ型の構文をとるが、\*No parecen tus proposiciones. と



いう文は意味をなさない。一方, *No parecen convenientes tus proposiciones.* という文は成り立つ。このことは, *convenir* が S のみを補完成分とする自動詞であるのに対し, *parecer* は, *ser* と同様 P を必要とする連結動詞であることを示唆している。それとともに, *Parece como si...* のような構文が存在することは, 従属節が S ではないことを示すものである。このような理由で, (me) *parece que...* のタイプの構文は, 従属節を P とする無主語文であると考えられる。

*parecer* はまた, 次のような

*Me parece bien que te diviertas, pero me parece mal que no estudies.*

構文も形成するが, この場合は, 従属節を文法的主語と考えて差支えないであろう。

ちなみに, 次のような

*Me parece difícil este problema.*

構文は, *Este problema me parece difícil.* のような 1 a 型 (S V P) の文の与格成分が主題化して, 語順が倒置したものと考えられ, 1 a 型に属する文として取扱う。

## 2 a. S V

*Los pájaros cantan alegremente.*

*Empezó la disputa.*

*José fuma mucho.*

*El niño duerme en la cama.*

S 以外の補完成分を要しない自動詞の文型である。この文型を作る動詞の中には, 従属節か不定詞を S とし, その場合, 倒置文型をとるグループがある。

*No importa que te haya dicho eso.*

*Me conviene quedarme en casa hoy.*

*Consta que estaba en París en aquella fecha.*

*Ahora resulta que el culpable soy yo.*

*Aconteció que en aquel momento se pusieron a ladrar los perros.*

このタイプの動詞は、上記の外、評価・判断を表す *bastar, faltar, precisar, urgir* など、および出来事を表す *ocurrir, suceder* などである。これらの中、評価・判断を表す動詞には、与格代名詞が付加されることが多い。

2 b. V

Llovió mucho ayer.

Está nevando.

自然現象を表す動詞、上記の外、*alborear, amanecer, anochecer, granizar, tronar, relampaguear* 等がこの型を作る。これらの動詞も、主に比喩的に用いられると、主語のある 2 a 型をとることがある。

Júpiter tronaba en el espacio.

Llovían injurias de su boca.

Amanecerán días mejores.

このように特別の場合に別の文型をとる動詞がある外、一般に、いくつもの文型で出現する動詞が少からず存在することは言うまでもない。

3 a. Ci V S

A Lupita le gusta la canción.

Me duele la cabeza.

Te sentará bien una temporada de descanso.

No me da la gana de decírtelo.

この文型をとる動詞は、非常に少い。一見したところ、文型 2 a の倒置文型をとる動詞 (たとえば、*me conviene...* など) に似ている。しかし、後者では、*Conviene estudiar.* のように与格代名詞を欠いた一般的叙述が可能なのに対し、前者では、\**Gusta estudiar.* のような文は成り立たず、Ci を不可欠の補完成分とすることで相違がある。

意味的に、一般の動詞は、S である行為者 (agente) の行為 (acción) を叙述するのが普通である。それに対し、この文型を代表する *gustar* は、形式的に Ci となって実現している被動者 (paciente) が S である対象に、いわば、どのような「反応 (reacción)」を示したかを叙述すると言える。また、一般

の行為動詞に対し、倒置文型を原則とするのも特徴である。そこで、*gustar* に類似するタイプの動詞、すなわち、倒置文型を正常語順とし、それを不可欠の補完成分とするか否かは別として評価・判断・感情など心理現象を具現する有生物 (*animado*) の被動者を与格または対格形式でとる動詞を便宜上、「反応動詞」と名づけることにしたい。既述の文型で言及した *parecer*, *convenir*, *importar* 等は、この範ちゅうに含まれる。

### 3 b. Ci V Cp

Me pesa de haberos ofendido.

RAE (1959, § 284) に単人称文の一つとして取上げられている特殊な構文である。他の動詞の例は、ないようである。前置詞 *de* が落ちる場合も多く、その時は、より一般的な文型 3 a に移行する。

### 4 a. S V Cp

Mi abuelo goza de buena salud.

No contábamos con su ayuda.

Rafael aspira a la fama.

El reo insiste en sus derechos.

Alicia vino de Méjico.

Carmen está en Madrid.

この型の動詞は、最初の4例のように動詞と前置詞とが1個の他動詞に相当するような緊密な統合をなし、*phrasal verb* と見なすことも可能なものと後の2例のように動詞の自立性が強いものの2類に下位分類することができる。

動詞によって Cp に要求する前置詞は一定しており、代表的な前置詞は、*a*, *con*, *contra*, *de*, *en*, *por*, *sobre* などである。*tener que*+不定詞構文では、例外的に *que* が Cp を導いていると考える。

この型を構成する動詞は、種類が多いが、再帰動詞の中にも、この型をとるものが少くない (*acompañarse con*, *aficionarse a*, *decidirse por*, *encargarse de* 等)。なお、再帰動詞を文型上、どう扱うかについては、最後の章で取上げる。

4 b. V Cp

Basta de conversación (y vamos a trabajar.)

Aquí huele a gasolina.

En la casa apestaba a ratones.

Hay que tener cuidado.

この文型は例外的であり、上記の外、この型をとる動詞は、Empieza a llover. のような自然現象を表す無主語文を除くと、ほとんどなさそうである。bastar はまた、(me) basta con... のような構成もとる。

hay que+不定詞構文をどの文型に含めるかは問題であるが、tener que 構文と同様、que+不定詞は Cp と見なし、この型に入れる。これらの que は、haber de+不定詞や deber de+不定詞における前置詞と同じ機能を果していると判断されるからである。

5 a. S V Cd

これは、最も多くの他動詞が構成する文型である。通常 of 行為動詞と反応動詞の二つのタイプに下位分類することができる。

He leído esta novela.

Este motor consume mucha gasolina.

Quiero comer unas galletas.

La noticia inquietó al pueblo.

反応動詞のタイプは、倒置文型をとるのが原則である。

Me interesa mucho el negocio.

Me agrada estar aquí.

No me ha convencido la película.

La preocupa mucho que no le escribas hace mucho.

このタイプが文型 3 a の反応動詞と相違するのは、被動者が Cd となることである。しかし、有生物の場合、Ci と Cd の区別は形式的に判然としないことが多いので、實際上、両タイプの区別に迷うことがある。

## 5 b. S V Cd Ci

この型は、Ci と Cd が nexus を構成するか否かによって、二つの下位型に分類できる。第1のグループは、nexus を構成しないものである。

Luis dio las flores a la niña.

Ana me enseña las matemáticas.

Juan le cogió las manos.

Este paisaje le recordará los valles de su tierra.

この類は、dar, quitar など授与および除去を表す動詞がその典型であり、上記の外、entregar, enviar, ofrecer, pagar, repartir, recibir, cobrar, pedir, robar, traer, llevar, deber などがある。以上の他にもこの文型をとる動詞は、少くない。

第2のグループは、Cd が不定詞で、Ci と nexus を構成する。

Isabel le mandó venir a su hijo.

Me hicieron reír mucho.

Los médicos me prohíben fumar.

Sus ocupaciones le impiden venir.

Ci は nexus の意味上の S を構成する。ただし、nexus の S が不定の場合には、Ci が表現されず、Hizo arrancar los árboles del jardín. のように 5 a 型になる。

このタイプの動詞はまた、Isabel mandó que viniese su hijo. のように nexus を従属節に変えることが可能である。

このグループを構成するのは、上記の動詞をはじめ、permitir, oponer, rogar, suplicar など命令・使役・要求または他者に対する意思を表す動詞である。

## 5 c. S V Cd Cp

この文型も、Cd と Cp が nexus を構成するか否かによって2分される。

第1は、nexus を構成しない型である。

El ratero la privó del monedero.

Mis amigos me obsequiaron con este cuadro.

Le iniciaron en los misterios.

Incitó a las masas a la rebelión.

Ciertas personas lo ponen en duda.

多数の他動詞がこの型をとる。Cp を導く代表的な前置詞は, a, con, de, en などである。

第2のグループは, Cp が不定詞で, Cd と nexus を構成する。

Yo le enseñé a escribir.

Me invitó a sentarme a su lado.

La falta de trabajo le indujo a emigrar.

El frío nos obligó a meternos en casa.

Ayudamos a Lola a limpiar el cuarto.

Cp の不定詞を導く前置詞は, a または例外的に de に限られる。不定詞の nexus 構造を含む点では, 5 b 型の使役動詞グループと似ているが, nexus の実現形式において次に図式化するような相違がある。

5 b 型 S : Ci V : Cd

5 c 型 S : Cd V : Cp

このタイプは, Ayudamos a Lola a que limpiase el cuarto. のように Cp を従属節に変えることも可能である。

このグループを構成する動詞としては, 上記の外, a をとる inducir, impulsar, empujar, impeler, mover, llevar, persuadir, tentar などがある。de をとる動詞としては, disuadir があるが, 外には余りないようである。

5 d. S V Cd Cpr

この文型では, Cd と Cpr が nexus を構成しているのが特徴である。nexus の中で Cpr が名詞的述部をなしているか, 動詞的述部をなしているかによって2グループに分けることができる。第1のタイプは, 名詞的述部をなすものである。

Han elegido alcalde a Pedro.

En su casa le llaman Pepe.

Encontré mi pueblo transformado.

No le considero capaz de eso.

このタイプにおける Cpr は、原則として名詞・形容詞（相当語句）である。これには、下記のように、

Le juzga como su mejor amigo.

Le había tomado por más inteligente.

Creo de mi deber advertírselo.

como, por, de が付加される場合も含まれる。

この型を構成する代表的な動詞には、上記の外、hallar, tener, mantener, llevar, poner, traer, sacar, volver, hacer, dejar, conceptuar, nombrar, recomendar 等がある。

このタイプは、さらに considerar, juzgar, creer など、nexus を従属節に変えることが可能なもの（たとえば、No considero que es capaz de eso. のように）と不可能なものとの2グループに分けることができる。

なお、次の文、

Juan hizo pedazos la lámpara.

における hacer pedazos のように表現が固定化したものは、1個の他動詞に相当する phrasal verb と考えるべきである。

文型 5 d の第2グループを構成するのは、主に知覚を表す動詞と dejar である。

Juan vio caminar a su amigo.

La oigo cantar.

Los descubrió robando.

La dejé llorando en su casa.

このタイプの Cpr は、不定詞と現在分詞であって、Cp に対し nexus の動詞的述部をなしている。使役の意味の hacer は、普通 5 b 型を形成するが、La hice callar. のような文では、この型に移行していると見られる。

このタイプは、第1のタイプよりも文型5 aとの結び付きが強い。たとえば、上記の *Juan vio caminar a su amigo.* という文は、Cprを除去しても (*Juan vio a su amigo.*)、動詞の基本的意味は変わらずに文が成り立つ。また、nexus部分を *Juan vio a su amigo que caminaba.* のように完全な Cd に言い換えることが可能である。さらに、nexusのSが不定であれば、*Oí decir que Pepito era loco.* のように不定詞のみが Cd となることもあり得る。以上のような点から、このタイプでは、nexus全体が動詞の Cd を構成していると思なすことも可能であろう。

なお、このタイプの動詞は、次のように、

*Veo la situación llena de dificultades.*

*Le dejamos libre el paso.*

第1グループの動詞と同様 Cd に対し名詞的述部 (形容詞・過去分詞) をなす nexus をとることもできる。

5 e. V Cd

*Hay una revista en la mesa.*

*Vino aquí hace siete años.*

*Hace calor hoy.*

存在を表す *haber* および自然現象と時間を表す *hacer* がこの型を構成する。動詞の種類は少いが、使用頻度の高い文型である。

## 6. 非人称文と再帰文

今までの概略的な説明では、不十分な論点や取上げなかった問題も当然残されている。それらの問題点を詳細に議論する余裕は、すでにないが、その中から非人称文と再帰文を文型上どう取扱うべきかについて、簡単に言及しておきたい。

次のような非人称能動文は、

*Se vive bien aquí.*

*Llaman a la puerta.*



論理的に有生物の行為者が前提されており、それが形式上でも表示されている不定主語の文であって、文型上Sのない無主語文とは、明確に区別しなければならない。<sup>(5)</sup> 当然、これらの文はSのある文型に割当てられることになる。

人称再帰文では、再帰代名詞を文型上どう取扱うかが問題である。次の3文を比較すると、

Luisa se mira en el espejo.

Me lavé las manos.

Me preocupo por el resultado.

第1の文は、言葉本来の意味で再帰的と言える場合、第2の文は、再帰代名詞がいわゆる利害の与格になっている場合であり、どちらも再帰代名詞を文型上の成分(Cd または Ci)と見て差支えないと考える。なぜなら、第1の文は、*a sí misma* 句の付加が可能な *SVCd* 構造の文であり、<sup>(6)</sup> 第2の文は、*Le lavé las manos.* のような *SVCdCi* 型の非再帰文と形式的にも意味的にも平行するものだからである。これらの外、相互的用法の再帰文も同様に考えて良い。

しかし、第3の文については問題がある。なぜなら、*preocupar* / *preocuparse* の対立は、*mirar* (眺める) / *mirarse a sí mismo* (自分自身を眺める) や *lavarle las manos* (彼の手を洗う) / *lavarse las manos* (自分の手を洗う) 型の対立に比べ、意味的にも統語的にも差異があるからである。すなわち、*preocupar* (心配させる) に対する *preocuparse* (心配する) は、決して *\*preocuparse a sí mismo* (自分自身を心配させる) に等しくはないのである。*preocuparse* は、語彙的に単一の自動詞に匹敵し、再帰代名詞はその一部を構成する小詞 (*partícula*) であると見ることができる。これと同じ他動詞の自動詞化用法と言われる類の再帰動詞 (*sentarse*, *levantarse* 等) は、すべて同様に扱って良いと考えられる。

この取扱いが妥当であるとするれば、いわゆる強意的用法の再帰動詞 (*irse*,

(5) *se* 非人称文の *se* を主語成分そのものとみなすかどうかは別の問題である。これについては拙稿 (1976) で考察した。

(6) *a sí mismo* 付加による検証については、Babcock (1970, § III) 参照。

dormirse 等) および義務的再帰動詞 (jactarse, quejarse等) も代名詞を動詞の一部分と考えて何ら差支えはない。

これらの再帰動詞を一種の複合動詞と考えるなら、アカデミアが近年採用した verbo pronominal (代名動詞) という術語は、この種類の再帰動詞に対してのみ用いるのが最もふさわしいと思われる。

ちなみに、上記第3文は、文型4 a (SVCp) に該当することになる。

### 引用文献

- Babcock, S.S. (1970), *The syntax of Spanish reflexive verbs*, The Hague.
- Dalbor, J.B. (1972a), A simplified tagmemic approach for teaching Spanish syntax, *Hispania*, 55, 490-497.
- (1972b), *Beginning college Spanish from sounds to structures*, New York.
- 松田徳一郎 (1977) 「英語の全体像をいかに認識させるか」英語教育12月号, 23-25.
- Moliner, M. (1966), *Diccionario de uso del español*, I-II, Madrid.
- 中島文雄 (1961) 「英文法の体系」研究社.
- Real Academia Española (1959), *Gramática de la lengua española*, Madrid.
- (1973), *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid.
- Seco, S. (1953), *Manual de gramática española*, Madrid.
- Stockwell, R. P., J. D. Bowen y J. W. Martin (1965), *The grammatical structures of English and Spanish*, Chicago.
- 高橋正武 (1961) 「西和小辞典」白水社.
- (1967) 「新スペイン広文典」白水社.
- 拙稿 (1976) 「スペイン語の非人称再帰文における “se” の機能」小樽商大人文研究, 52, 167-184.